会議報告

公益社団法人日本顕微鏡学会 第65回シンポジウム

樋　田　一　徳

第65回シンポジウム実行委員長

[a]川崎医科大学解剖学

[b]大阪大学超高圧電子顕微鏡センター

今回で第65回となる公益社団法人日本顕微鏡学会シンポジウムは,『微と美の調和～ Beautiful Harmony ～』をテーマに令和4年11月5日（土）から6日（日）の2日間，川﨑祐宣記念講堂（川崎学園・岡山県倉敷市）において開催された．両日とも天候に恵まれ，爽やかな秋空と紅葉に彩られた会場に（写真1・2・3），総計251名*の参加者を得て盛会のうちに無事終了した．なお前日朝から当日直前まで，日本カナダ先端分析顕微鏡合同セミナー（日加国際シンポ；JSPS：実行委員長・大阪公立大学・森茂生教授）も同会場で行われた．

過去最大となった新型コロナ感染症第七波が収まり始めた開催4週間前に，懇親会場となる大原美術館（公益財団法人・倉敷市）業務推進課長と，料理担当の倉敷国際ホテル宴会部長を実行委員会に招き協議して通常の対面開催と決し，その後の学会理事会の了承を得て最終的に対面開催となった．お招きする立場として，量よりも質，加えて和をモットーに，“実行委員会は規制でなく，いかに実行するかである”ことが，三者の共通認識として得られたのは実に幸いであった．振り返れば，開催月末からの第八波の狭間での開催は天恵であり，誠に感謝に堪えない．

5日（土）午前10時，日加国際シンポの終了に引き続き，幾原雄一学会会長の開会挨拶（写真4）によりシンポジウムは始まった．会場は第1会場（記念講堂：収容2千名（写真5･6））と隣接した第2会場（多目的ホール：収容2百名超（写真7））に分かれ，初日午前は，第1会場では合同センション1（5演題）：「Network Tele-Microscopy」，第2会場では合同センション2（4演題）「FIB技術が生み出す極微試料作製法の変化」，午後は第1会場で非生物系セッション1（4演題：装置・手法）「電子顕微鏡像コントラストから読み解く三次元ナノ計測」，第2会場で生物系セッション1（5演題：クライオ電子顕微鏡法を用いた生体構造解析の進展」，引き続き第1会場においてオックスフォード大学解剖学より Prof. Zoltán Molnár をお招きし，基調講演として『THE EVOLUTION OF BRAIN DEVELOPMENT』を講演いただいた（写真5）．

基調講演後，希望者はバスで倉敷市美観地区へ移動し，国内屈指の大原美術館において懇親会が催され（写真8），予め申し込みをした登録者80名にスタッフ19名を加えた99名が参加した．大原美術館と日本顕微鏡学会の珍しいコラボレーションであり，密を避けるように全体を3つのグループに分け，美術館学芸員の引率説明による館内ツアーを1時間行なった後，18時半よりメインホールにて開演した．大原あかね理事長のご挨拶を得て（写真9）ほぼ3年ぶりの懇親

写真1　川﨑祐宣記念講堂（会場全景）

Kazunori Toida: The 65th Symposium of The Japanese Society of Microscopy in Kurashiki ～Beautiful Harmony～

[a]〒701–0192 岡山県倉敷市松島577

[b]〒567–0047 大阪府茨木市美穂ヶ丘7–1

E-mail: toida@med.kawasaki-m.ac.jp

写真２　会場入口

写真３　受付風景

写真４　開催挨拶（幾原会長）

写真５　基調講演（Prof. Zoltán Molnár, University of Oxford）

写真６　第１会場（記念講堂）

写真７　第２会場（多目的ホール）

写真８　懇親会（幾原会長挨拶）

写真９　懇親会（大原理事長挨拶）

写真 10　秋の夜長（倉敷美観地区）

写真 11　ポスター会場（第 2 会場・多目的ホール）

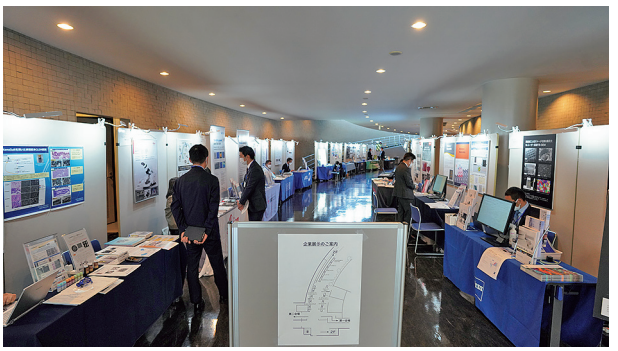

写真 12　企業展示

写真 13　お茶席

会，しかも名画の前のシャンパンで乾杯に始まり，旧交を温めつつ 2 時間が進行，感染対策も功を奏し，夢の宴は無事に終了した．“生涯忘れられない思い出となりました”と，多くの参加者より感想をいただいたことは無上の喜びである．

秋の夜長（**写真 10**）を久しぶりに観光地で過ごされた参加者が翌日再び集い，2 日目が午前 9 時より始まった．午前，第 1 会場では非生物系セッション 2（5 演題：材料）「今後の材料科学における透過電子顕微鏡法への期待」，第 2 会場では生物系セッション 2（4 演題：構造解析）「クライオ電顕全国共同利用体制」，引き続き第 2 会場ではポスターセッション（27 演題）が開催された（**写真 11**）．午後は第 1 会場において公開講座（4 演題）「脳－身体連関を読み解く顕微鏡解析の最前線」（JSPS 学術変革領域共催・倉敷市教育委員会後援）が行われ，事前に学会常務理事・秋元義弘教授と学会副会長・岡部繁男教授（領域代表）による事前ミニレクチャーが行われた．公開講座終了後，実行委員長より閉会挨拶を行い，2 日間のシンポジウムを無事に終了した．以上の詳細は要旨集（本誌特別号：文献）も参照されたい．

会期中，カールツァイス（株），トキワサイエンス（有），サーモフィッシャーサイエンティフィックによるランチョンセミナーが，また公益財団法人風戸研究奨励会受賞講演会（2 演題）が開催された．このほか 15 の企業展示を含む 26 の心温まる企業賛助を得て，学会・産業界が合力し，一層彩りを増し充実したものとなった．この場を借りて，関係各位に深甚なる謝意を表したい（**写真 12**）．

また実行委員長企画として，郷友の楽焼「安加比古窯」（愛知県蒲郡市）加藤隆生師指導による川崎医科大学茶道部と会員有志によるお茶会（**写真 13**）と作陶体験，名版画展示，倉敷最古の備前焼専門店「陶備堂」の備前焼展示即売会，懐古昭和レコード鑑賞などを行い，新たな同好の集いが会に花を添えた．

新型コロナ感染症は依然として収まる気配がないが，その中で最先端の研究の迫真の発表に熱心な議論が湧き盛会に開催できた当シンポジウムでは，困難を乗り越えて学問を実践しようとする参加者・会員の情熱とエネルギーを肌で感じることができた．我々の仕事は“微の探求”であるが，その目的はまた“美の追求”でもあり，その調和をいかにとるかが課題であり，今後の顕微鏡による科学の発展と人材育成に資すると思う．そのようなことを直覚しながら，深い感動とともにシンポジウムのお世話ができたことは誠に幸いであった．

シンポジウムの盛会な開催は，上述の関係各位はもちろんであるが，特に成功に向けて日夜努力した 31 名の実行委員会各位と，開催に向けて大きなご支援とご指導を賜った会長・副会長・理事・事務局各位のお蔭であり，ここに深く感謝を申し上げる次第である．今後も顕微鏡学会シンポジウムが学会の発展に更に寄与できるよう心から願い，会議報告としたい．

* 事前参加登録 153 名，当日参加登録 20 名，企業展示関係各位 45 名，スタッフ 33 名，総計 251 名

参考文献

顕微鏡 Vol. 57 Suppl. 2 2022